立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１２年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学　研究科　フランス文学　専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科フランス文学専攻博士前期課程２年	中田　麻理　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部文学科フランス文学専修	坂本　浩也　准教授　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題名	『ブレストの乱暴者』における親密性		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	２０１２年度		
研究経費	１９６５２３円（執行額）		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

フランス２０世紀に活躍した作家ジャン・ジュネ(1910-1986)は、創作活動の初期においては自分自身の体験をもとに、自伝的小説として男性同性愛の世界を描いてきた。しかし後期には一転してより社会的・政治的なテーマを扱うようになる。それに伴って、作品において女性登場人物が重要な役割を果たすようになる。ジュネにとってジェンダーはどのようなもので、政治性とどのように関連していたのだろうか。本研究は、ジュネにおいて重要な転換点として位置づけられる第４作目の小説『ブレストのクレル』(1951)を中心に扱い、男性同性愛と娼婦がどのようにえがかれているかを検証することで、ジュネにおけるジェンダーと政治性の問題を再考するものである。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　ジャン・ジュネ　〕〔　親密性　〕〔　ジェンダー　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

ジャン・ジュネにおけるジェンダーという問題を考える上で、『ブレストのクレル』という作品は重要である。というのもこの作品は、それまでのジュネ作品と同様に男たちの同性愛的関係を描いた作品であると同時に、女性登場人物が初めて中心的に描かれる作品でもあるためである。また本作品で重要な役割を果たす淫売屋の女主人マダム・リジアーヌは、娼婦であるという点が、ジュネの主要な後期作品における女性登場人物と共通している。そのため本研究では、マダム・リジアーヌと男たちの関係に着目し、「親密性」という観点から娼婦がどのような役割を果たしているかを検証した。

第一章では、語りの問題に着目し、男たちの同性愛がどのように描かれているかを確認した。その際、まず「わたしたち」(nous)という語り手の人称に着目した。ジュネの従来の小説においては、「ジュネ」あるいは「ジャン・ジュネ」という名の一人称の語り手が存在し、物語はそうした語り手の夢想であるという構造であった。こうした従来の作品において、語り手の「わたし」(je)という人称は「倒錯者」である語り手を意味し、一方「あなたたち」(vous)は「通常」の人々である読者を意味していた。しかし『ブレストのクレル』にはこの語り手は存在せず、語り手の人称は「わたしたち」(nous)という一人称複数である。 本作品において「わたしたち」は語り手が読者を巻き込んだ複数の人称であり、語り手と読者は同じ内面的夢想を共有する「倒錯者」同士であるとされている。このことからいえるのは、第一に語り手と読者の間に一種の親密性が想定されているということである。小説そのものが、語り手と読者が内面的な欲望を共有する親密な「語り」の空間として提示されている。そして第二に、内面とされるものの領域を揺るがしうる越境性が挙げられる。性的な欲望は通常きわめて個人的なものと考えられている。そうした欲望を他者と共有しうるということは、私秘的であることの自明性に揺さぶりをかける。さらに、性的な欲望の中でも「普通でない」欲望は、その欲望を持つこと自体が隠すべきことだとされている。そうした欲望が自明のこととして語られることはそれ自体が挑戦的である。また、本作品においては同性愛者たちを「外部」としてまなざす一般の人々の視点は、「新聞」の引用というかたちで距離を置いて取り入れられている。その結果、同性愛をめぐるイメージの問題そのものがテーマとして前景化している。

第二章では、登場人物たちの同性愛のカップルがどのように描かれているかを具体的に検証した。本作品では、男たちにとって同性愛は「恥」として認識されている。とくに同性愛者が「女性的男性」であるというイメージは、彼らが強く忌避するものである。そのため、本作品に描かれる男たちの同性愛の関係は、世間の人々の同性愛に対するイメージを何らかのかたちで裏切るものとして描かれている。

クレルとマリオは、お互いの「男性性」に惹かれて愛し合う。その結果、警察官と殺人者という、通常では考えられないような 2 人が結びつく。彼らの関係は、世間の同性愛のイメージに反する点と、警察と犯罪者が親しくすることが秩序攪乱的であるという点の両方で、挑戦的なものである。同時に彼らの関係は、彼ら自身の中では世間から見捨てられる孤独の感情として経験される。彼らが屋外で愛を交わすのは、「通常の」社会の外の存在であることを象徴的に示している。社会から見捨てられているため、彼らは 2 人でも「孤独」である。

さらに、本作においては犯罪が男たちを結びつけるものとして描かれる。クレルは共犯者殺しの常習犯であるが、彼にとってそれは裏切りではなく、「友達」を盗品に閉じ込めて所有するために必要な儀式である。一方海軍大尉セブロンは、クレルと犯罪という秘密の共有を通して親密になろうと考える。

彼らが築くこのような特殊な関係は、「異性愛のような愛」では決してなく、社会的枠組みや常識の外に築かれる関係やその表現を模索したものである。

第三章においては、淫売屋《ラ・フェリア》の女主人マダム・リジアーヌと男たちとの関係を分析した。マダム・リジアーヌは、淫売屋そのものを牡蠣、リジアーヌを真珠とする比喩によって、淫売屋と一体化した存在として描かれている。男性の欲望を喚起する存在として、淫売屋の社会的役割そのものを引き受けている。その一方、娼婦であるにもかかわらず彼女はブルジョワ女性のような性的規範を深く内面化している。そのため、情夫のロベールの前で「娼婦のような」態度をとることを嫌いさえする。彼女は、自分自身が男たちの目に娼婦として写っていると感じた時に、強い孤独の感情を味わう。彼女は、娼婦であるという点で社会から逸脱した存在であると同時に、「まっとうな」女性でいなければならないという思いが強いため、社会の外に親密な関係を築くこともできない。

研究成果の概要　つづき

彼女自身が「孤独」であるのとは対照的に、彼女の司る《ラ・フェリア》自体は男たちが集まる空間として重要な意味を持つ。クレルは、リジアーヌの部屋を通して、ほかの与太者の男たちとのつながりを感じる。淫売屋は、性的な行為がなされる場所という意味では私秘的な空間であると同時に、複数の匿名の男たちが出入りするという意味では公共性も持つ、両義的な空間である。同時に、「通常の」人たちの社会の外に位置するものでもある。実際、《ラ・フェリア》の中心的客層は労働者階級の男たちであり、例外的にきわめて特殊な性的指向を持つ社会的地位の高い男たちも通うとされている。《ラ・フェリア》に集まる男たちはブルジョワ社会における規範を逸脱するという意味で、いわば社会の「外部」である。そのため、《ラ・フェリア》は、社会に受け入れられない男たちが集まり、親密な関係を媒介する場所として重要な意義を持ちうるのである。

以上に見てきたように、本作品における親密な関係は、当時の社会における性的規範と深く関連し、それを逆照射するものである。男たちは同性愛的な関係を持つことによって、社会から取り残される孤独を感じる。しかし同時にその関係は、社会の外に築かれ、社会の外における親密な関係を模索するようなものとして描かれている。一方、ブルジョワ社会における性的規範を深く内面化した娼婦リジアーヌは、男たちと望むような関係を築くことができない。彼女は一見すると男たちと親密な関係を持ちながらも、内面的には深い孤独を味わっている。このように、本作品におけるセクシュアリティの表象には、ジュネが対峙してきた「まっとうな」人たちの社会が影を落としている。

そして、淫売屋という場所は、性的な行為がなされる場所という意味ではきわめて私秘的である一方、複数の男たちの出入りする場所としては公的な意味を持ちうる。そのため、社会の外に置かれた男たちが集まる場所として、一種の政治的な意味を持ちうる。また娼婦であるリジアーヌは、男たちを媒介する場所としての役割を果たす。淫売屋というモチーフはこうした意味で政治的な場所として『屏風』(1961)や『バルコン』(1956)といった後期演劇に受け継がれていったと考えられる。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

該当なし